連載

コラム

SDGS Safety Domestic Green Society

安全な国産グリーン社会

第㉑回

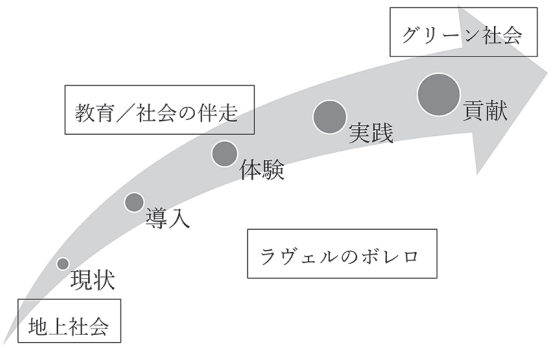
グリーンの考察と要用②
―グリーンの教育とステークホルダー

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

▼はじめに

SDGsのG（グリーン）についての続報である。本稿の主旨と目的は、地球での暮らしを続けることの大切さ、重要性を、利害関係者が共有することである。すなわち、持続可能性やそのためのグリーンの関わりについて接近―考察と要用―することである。ここでは、利害関係者（ステークホルダー）の範囲についての認識が大事となる。それは、企業経営や経営現場でまっとうな事業を行うためには、だれでもが理解すべき相互協同意識である。

グリーン社会（Gs）、あるいはグリーンコミュニティの創成過程においては、心情の変化をつくらなければならない。そのための推進力は、教育であり、それは、個人の活動力のほか、企業や社会の変革力をつくり出す。教育においても、ステークホルダーが介在する。



教育の段階

グリーンの状況づくりは、人づくりとしての教育であるといえる。効果ある教育のためには、多くのステークホルダーでの重層的な連携が必要である。

本稿では、グリーンと教育、そしてステークホルダーという視点から述べたい。

▼ステークホルダー

企業活動には、多くのステークホルダーが介在する。web検索上では、消費者、顧客、従業員や関連グループ会社、競合他社、取引先企業、代理店、株主、投資家、債権者、金融機関（銀行・証券・保険会社）、運送、配送業者、地域社会、地域住民、行政機関、NPO・NGO、利益団体、研究機関、専門家、報道機関など、があると列挙されている。

ステークホルダーは、上述のように多様であり、個々の立場での利害関係は、相互に広がり、波及する。

こうして、ステークホルダーマネジメントというコンプライアンスができる。それが、事前対応としての所作条件であり、具体的な手続きとなる。グリーンを職務とする場合には、企業の事業益と社会益としての取り組みが必用となるが、その場合には「環境哲学」の定着や、環境学習の理解が、ステークホルダーで共有することが望ましい。

▼教育の必要性

人間は、ほかの動物よりも学習能力に優れており、急速に進化し、動物世界の頂点にいると考えられる。地球上で「人間中心主義」なる言葉や概念をもち、科学技術を生み出し、便利と快適を希求している。その反面、多くの悪影響や弊害もあり、ここで述べているような〝グリーン〟について考察し、要用すべき局面をつくり出してきた。

その解決のわかりやすいキーワードは、「持続可能性」である。そして、解決策の一つは、前述のように〝グリーン〟に関する教育を導入することである。

大資本を持つ企業も、その事業推進のために、CSRとして、環境教育やSDGsを用いたPRをしている。これも、企業の経済活動、すなわち企業益活動である。が、本質的には持続可能性や〝グリーン〟の意識の獲得や醸成を、個人の意識として行うことが正しい。それは、人間としての最も基本的な単位が個人であるからである。企業や役所に勤めていても、あるいは国家の首相や大統領も同様である。

企業でも、もはやRE100を社是や目標にしなければ、まっとうな事業活動はできない。生きるための環境や基盤が大事なことは総意ではある。しかし、全般的に、その保全や整備が為されている訳ではない。

それゆえ、グリーン社会／グリーンコミュニティを造るための取り組みは、段階的で、かつ時間を要する。そのアプローチを示したのが上掲の図である。現状から、段階として、⬇導入⬇体験⬇実践、そして⬇貢献（グリーン社会）を導く。こうして動機付け、さらに定着のためには段階的に進行する。

その様子は、一般の教育と同じく、親や教師の伴走、あるいは社会の伴走により、進行・加速し、目標達成に至る。飛躍した比喩であるかもしれないが、ラヴェルのボレロの音楽のように徐々に進行し最後に絶頂を迎える。

教育には時間はかかるものではある。ゆえに、一般企業の経営者の中には教育よりも訓練や体験、あるいは金銭的な動機付けが一番速くて大事あるという方もいるだろう。しかし、多様化、DX、AIなどの登場し、新たな変化や状況が変わってくる現状においては、もはや訓練や体験もできないこともある。応用の効く、融通を得た対策や手法を身に着けるには、教育の本質に立ち戻ることが必要である。

教育は、「考える力」の育成がポイントである。最も大事なことは、「行動する意識づくり」である。

教育についてまとめれば、「教育」とは、直面する課題に対して自らが、解決方法を見つけ出す能力の養成であることを強調したい。

▼グリーンを深緑に Deep Green

本コラムで掲げているSDGSは、グリーン社会（コミュニティ）を造ることにある。そのキーワードはGREENであり、その要件と解釈については前報で述べた。その醸成にはいずれの場合も「教育」が大事である。国産国内化、空洞化した現状の改善、地方の整備が必須である。これには、人材の育成、社会感覚の変化、国際化、環境保全、持続性という要素が必須である。

筆者は、既報において共感をもってグリーンを深めるために、「グリーン、グリーナー、グリーネスト」と称呼したが、ここでは短く、「ディープ・グリーン」とした。ダーク・グリーンではなく、ディープである。

この言葉は、いくらか哲学的な背景をもって選択した。〝グリーン〟の実践という意識改革には、個としての自由意思を要求している。それは、共同社会をつくるという意志ともなる。それは、ドイツの哲学者・シラーが掲げた「自由の美学」に依拠している。現実から理想の美の世界（ここでは、グリーン）を、自律の精神により、確かな道徳的な世界を導くことを期待してのことである。この過程では、個から個に伝播する。同時に、それは、個人としての活動から、企業や社会の変化をつくり出し気運となり、それが循環と伝播をつくり出すとの考えからである。

▼まとめ

以上の取り組みは、結果として、広く「ウェル・ビーイング」の成果を期待している。暮らしにおける落ち着きや豊かさ、そして快適さは、上品なアートをも感じ取れる。

次回は、そうしたグリーンの広がりについて、自然と至然の対比、環境哲学の考えも加えて述べたい。